

「現代版枕草子」作りの試み

呉 羽 長

はじめに

勤務校の富山大学で開設する授業科目は、一般教養科目と学部専門科目に分かれており、私の場合一般教養科目では教養原論「日本文学」、学部専門科目では「日本文学史」「日本文学講読演習」などを担当するが、それぞれに『枕草子』を取り上げることがある。大学院教育学研究科「国文学特論」などでも国語教科書教材解析の一環として『枕草子』を取り上げている。

右科目の中で教養原論「日本文学」の場合、その授業内容は、主に上代から近世に至る古典諸作品の内容と意義について、自身の捉えた見どころを披瀝しながら解説するもので、作品固有の魅力を理解した上で、古典世界への興味関心を促すことをねらいとする。各作品について一回（九〇分）完結で紹介する形式なので、取り上げる作品は限られるが、そうした作品の一つとして『枕草子』がある。『枕草子』をめぐる授業では、成立の事情に関わって中関白家の繁栄から没落への経緯や、清少納言の定子サロンの中での役割、定子と清少納言の結びつきをめぐるドラマを、日記回想的章段のいくつかをあげて明らかにし、更にそうした後宮サロンを特徴づける美的感覚が込められるも

のとして類聚・随想の各章段を読み味わうこととしている。

その際、それぞれの章段に描き出されたものが当時の美意識の中におさまりきれず、清少納言の新しい美を作り出そうとする姿勢の反映であり、清少納言の感覚によって選ばれた美的世界が現代でも通用する新しさを持つものであることを示すのに、受講生に「ありがたきもの」「めでたきもの」「すさまじきもの」など、ある標目（題詞）をあげてそれに当てはまるものを考えさせ、短評を付させるという課題を出している。

学生の提出した中から、題詞にあさわしい事柄とそれに付された項目を選び、古語的な表現に整えて並べたものを次の授業時間に『枕草子』の「現代版」として示して、本来の『枕草子』の章段の作られるありようの一端に思い及ばせている。受講学生は題詞に従って挙げられた事柄への共感から現代に通ずる清少納言の発想に新鮮さを感じるもののである。

このような知的遊戯を伴う試みは学部の専門科目「日本文学史」の中で『枕草子』の文学史的意味を示す折とか『枕草子』を扱った「講読演習」での各章段の読解考察のあとなどにも受講生に課すことにしている。その作例をここに紹介することで、『枕草子』世界を身近なものとして理解し清少納言の物の見方

を現代の生活の中に確認する一つのあり方を提示してみたい。

一 教養原論「日本文学」の場合

まず教養原論「日本文学」で提出されたものに配列等を行つたものを掲げる。(一)内は学部、氏・名のイニシャル・性別を示す。富山大学では平成十七年十月の再編統合により、教育学部が人間発達科学部となり、人間発達科学部は十八年四月以降の学生を受け入れている。

①「ありがたきもの」(平成十六年十月課題提出)

朝食を摂りて大学に出ること

(教育 O・Y 女)

朝、朝食を摂りて悠々と大学に間に合ひたる日

(人文 O・N 女)

居眠りたる学生のおらぬ講義

(教育 I・T 男)

車庫入れ、一度にてピタリと入れたる

(教育 N・M 女)

釣銭、貳千円札にて返り来ること

(教育 T・A 女)

半円の途切れなき虹

(教育 O・A 女)

冬の日にはつきり見えたる立山の峰

(人文 K・N 男)

心地よき冬晴れの日

(人文 K・T 女)

我が切れる前髪のうるはしき

(教育 N・A 女)

悪しき評なき総理大臣

(教育 Y・E 女)

夢に現はるる我が思ふ人の現実^{うつつ}に我を思ふこと

(教育 匿名 女)

「ありがたき」は「めつたになく珍しい」の意である。「枕草子」では「舅にほめらるる婿^{めかけ}。また、姑におもはるる嫁の君毛のよく抜くる銀の鐙^{けぬき}。主そしらぬ従者。つゆの癖なき^①。(以下略)」「(七一段)とある。そうあることが稀な事柄を挙げたことについて、なるほどと納得し知的快感を催させられる。受講生の掲げた項目もそうした内容のものになっている。①の中では、まず大学へ入り立ての学生が朝の苦手な様子が窺える。「車庫入れ云々」は、大学へ入り車の運転免許を取得したての折の、意のままにならぬ運転の様子を捉えたもの。なお、「夢に現はるる云々」を匿名にしたのは、記事内容の切実さにより授業の中でその名前を示すのを避けたためである。

②「めでたきもの」(平成十八年十月三十日)

透きとおるような白き肌の人

(教育 I・R 女)

人の心からなる笑顔。

(人間発達 S・S 女)

子どもの笑顔もめでたし。

(人間発達 M・K 女)

春、満開の桜。

(人間発達 M・N 女)

また、桜の散る折。

(人間発達 S・M 女)

晴れた日に見える立山連峰

(教育 M・A 女)

エッフェル塔の上から見渡すパリの景色

夏の花火。夜空の巨大な姿に驚きと感動のあり。

秋の夜の満月。雲なき空に照り渡るはさらなれど、雲ありて隙間から時々顔を出すもよし。

(人間発達 S・M 女)

「めでたし」は「何ともいえずすばらしい。立派だ。」の意であるが、『枕草子』で「めでたきもの」は、「唐錦。飾り太刀。造り仏の木画。色あひふかく、花房ながく咲きたる藤の花、松

にかかりたる。六位の藏人。(以下略)」「(八十三段)とある。

②のうち、「子どもの笑顔」は教育実習の事前指導などで附属小学校へ行き小学生に笑顔をもつてまわられた体験から発したものである。「晴れた日に云々」は北陸富山が冬季は曇天が続く晴れる日がまれであるという地域的事情を踏まえる。「エツフェル塔云々」は、パリへ旅行に行きエツフェル塔から市街を見渡したときの感慨を「めでたし」と吐露したものであろう。

次に「すさまじきものの」の二例を掲げる。「すさまじ」は「興ざめ」「予想外」のことを示す。「枕草子」では「すさまじきもの」として、

昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣。牛死にたる牛飼。ちご亡くなりたる産屋。火おこさぬ炭櫃、地火炉。博士のうち続き女子生ませたる。方違へに行きたるに、あるじせぬ所。まいて節分などはいとすさまじ。(以下略)(二三段)

と続き、作者が期待していたりそうあるのが当然と思うことに對し、当てがはずれた時の落胆や違和感が示されている。

③「すさまじきもの」(経済学部夜間主コース 平成十年十一月)

大晦日の月見そば

(O・K 男)

湯を入れて十五分を過ぎたカップ麺。テレビに熱中し気付きてフタを開くるに、すさまじき心地す。

(O・T 男)

天気予報に「晴れ」といひたるに、出かけたる所にて、雨、曇り空よりポタリと落ちたる。

(M・S 女)

傘を持たざる折に雨降りたる。濡れて家に着くや止みぬる、いとすさまじ。

(M・J 女)

友人の、電話にて話弾みたる時に、「バイバイキーン」とて切り

たる。また、待ち合わせて遊ぶ提案せし人の、約束の時に遅れて来たる。笑みで誤魔化したるは、いとすさまじ。(M・M 女)

映画館にて、携帯電話、息をのむ場面で鳴りたる。電話を携えて行くを見るに、スクリーンにひきつけられたりつる心、現に戻されたる心地してすさまじ。(F・S 女)

駅の階段を急ぎ下りきりたるに、発車したる列車の後ろ姿。

(H・R 女)

うまい店、との評判を聞きて即行きたるに、味のわるき店。

(H・Y 女)

④「すさまじきもの」(平成十七年十一月八日)

友人より借りたるCDに何も入らざりし。また思ひしに異なる曲の入りたる。

(教育 K・E 女)

定価で買ひし服の、一ト月の後セールにて半額にて売られある。

(人文 W・J 女)

急ぎで一階に降りたるも、四階に鍵を忘れたる。

(教育 O・T 女)

久しく会わざる友人にメールを送りしに、アドレス変更により返り来たる。

(教育 N・M 女)

録画予約するも、ナイター延長にて、ドラマの半分のみ録画されたる。

(教育 N・H 女)

日本シリーズ、大激戦を予想したるに、阪神四連敗なる。

(教育 M・T 男)

十月三十日に火星の最接近と聞き空を見て待つに、雲、空を覆ひたる。

(教育 M・Y 男)

それぞれ期待するものとその現実の間に落差があり、第三者

から見て滑稽感が現れ、時に哀感を抱かせられるものもある。

③の「バイバイキーン」とはアンパンマンの敵役のバイキンマンが退場するときの台詞であり、その台詞そのままを言われて突然電話を切られてはやるかたない思いであつたろう。④の中の「阪神四連敗」は、平成十七年秋の日本シリーズのこと。阪神と戦ったパ・リーグチームは千葉ロッテマリーンズであつた。阪神ファンにとつて四戦後の結末は堪えられぬものであつたと推察される。また平成十七年十月三十日は火星が地球に最接近するということで、その報道など喧しいことがあつた。この年度の教育学部入学生は学部最後の学年に当たる。

二 学部専門・大学院の授業の場合

右のような教養教育で課した事項の配列は、入学後の学生の生活に関わる新鮮な感覚が窺われるが、一つの題詞に沿った単発的な事柄の提示というレベルにとどまる感がある。同じ課題を学部（教育学部）専門教育や大学院（教育学研究科）の授業でも示したところ、学生生活に厚みが出てきたことを反映して題詞に対するより深い掘り下げが認められた。

⑤「すさまじきもの」（「日本文学講読演習Ⅰ」平成四年七月）

暑中見舞い、年賀葉書にて送られきつる。

（Y・M 女）

シスコーンの多きチョコ・パフェ。アイスクリームの多きこそ願はしかるべけれ。

（I・K 女）

剣道部の練習終り、後輩の頼み頼みて買はせたるビールの冷えたらぬ。

（K・K 男）

あてに好ましと思ひわたりける人の、ズーゾーとスー・コーヒーなどすすり飲みたる。

（K・E 女）

うるはしくかざりたる膳のもの、かきまぜて食ひつるは、心みえてすさまじ。目もちて食ふをこそ、あてといふぞかし。入社試験に行きて交通費出さぬ会社の人事部。

（T・T 女）

エキスポ富山、紀子さま見たてまつらんとて、炎天のもとに乳子連れたる母親。乳子泣きたれば黙（もだ）さすとして揺るがしおどしたる。

（O・T 女）

まだ見ぬ評判の映画のあらすぢ、見たる人の詳しく語りたる。

（K・K 男）

映画館にて居眠りたる男もすさまじ。おほかたみな涙ぐむあたり、起き出でて、大きなあくびうちしたる。興いたづらになりて、すさまじといふもおろかなり。

（N・A 女）

誕生日のプレゼント、至りの心推しはからんとて待つに、「何をか求むる」とて直に尋ね聞きたる。我より「それほし」ともいふべからんや。

（H・H 女）

右は、私がこうした試みを学部の授業で行った最初のものである。このうち「入社試験に行きて」の項では、バブル景気の余韻が残る時期でもあり、教育学部でも会社からの求人が多く、会社の中には入社試験に來た学生の交通費を支給するところがあった。T・Tさんもそれを期待したのであるが、その期待はずれたようである。「エキスポ富山」は、平成四年七月十日から九月二十七日まで富山県射水郡小杉町（現射水市）の太閤山ランドで開催された地方博覧会のこと。その式典にご結婚後間もない秋篠宮ご夫妻が来られ、O・Tさんも宮夫妻のロマン

スを身近に感ずべく式典会場へ出かけたのである。これらを見ると、演習の担当で『枕草子』の類聚的章段のいくつかの読解を経験した後のことでもあり、自分のもつ感覚・美意識などを自覚した上、それを「すさまじき」結果と対比してそれぞれに独特の滑稽味を出しているように思う。全体に教養教育でのものより深いものが見られる。

次は「心ときめきするもの」についての二例である。「心ときめきする」とは、どきどき・わくわくする心の状態で、心配・期待・心の高揚など様々な場合がある。『枕草子』では「雀の子飼ひ。乳児あそばすところの前わたる。よき薫きもの炷きて、ひとり臥したる。唐鏡の、すこしくらき見たる。(以下略)」（二六段）とあり、清少納言のかすかな期待、そこはかとなき喜びの類想などが綴られている。

⑥「心ときめきするもの」(大学院教育学研究科「国文学特論」平成十年六月)

人より送られ来たる文・小包を明けむとするとき。誕生日近きに届けらるるはさらなり。

夜アパートに帰るに、留守電の常よりも赤く点滅したる。

秋晴れの、銀杏の黄葉のあざやかなるころ。生協前に出づる鯛焼き・お好み焼きの店のことなど思はれて、いみじう心ときめきたり。

(I・A 女)

春告げる梅の香。入学式の初々しき顔。

日入りて、冷えたるビール飲みて野球中継を見んとする折。

通勤の途中、フルフェイスのヘルメットよりなびく黒髪。その容貌やいかにと思ひはせらる。

案内書などめくり、旅にあれこれ思ひめぐらす。ことに見るべき所なくとも、憂ひ忘れ心かろくなりぬ。妻子伴はぬ旅に出づるとき。公務なりとも暇を見つけむと、胸高鳴るものなり。

(S・A 男)

クリスマス近きころ、ツリー・ろうそくなどあつらふに、当日よりころときめきするものなり。

期末試験の最終日、重荷より放たれ、家に帰りて何せんと思ふ。

(T・S 女)

思ふ人を駅にて待つひととき。いま来む、かの人群れか、つきのかと、目も離さで探す。その人帰りて一人になりたる宵、恋する若き女の悩みたるをうつすテレビドラマに我が身を重ねて見る……。

大学に行きて、A子にあはんとするとき。うまきもの食ひ足り我に向くやすらぎの丸き顔を思ひつつ、灯のつきたる院生室のドアをひく。

(Y・H 女)

⑦「心ときめきするもの」(『日本文学史』平成十七年七月)
ガラスの小瓶よりあふるるアメ玉の色とりどりに輝きたる。

(H・N 女)

夜、雨のいたう降りたるが、朝方晴れ晴れしくなりて光あふれ、えならぬ匂ひのさと薫れる。

(T・T 女)

雨あがりの虹。三つ重なりたるはいとど。

(T・I 女)

好きなミュージシャンの新しいCDを聴くとき。

会ひたき人に会ふとき。

(K・A 男)

いとしき人の運動姿を見たる。

(M・Y 男)

新しき人に会はんとする時。新しき所に行かむとする時。未知

なるもの知る時は、いづれも心ときめきす。

(K・M 女)

遺足。宴会。特に前日の夜は一睡もできず。

(I・T 男)

長き休みに入りたる初め頃。この休みをいかにせんと思ふに心ときめきす。休みの終わりに近づきてむなしき心となる。

読書。物語・小説など、新しき書を開きとく続き知らばやと読を進めたる、いたう心ときめきす。

(T・A 女)

⑥でI・Tさんは島根県から富山へ来た学生。両親から離れての一人暮らしの生活感覚が共感を誘う。S・A氏は現職の中学校国語科教員で大学院に派遣された人である。またY・Hさんの掲げたものの中にある「A子」とは、まさにその項目を掲げたI・Aさんのこと。I・Aさんの人柄と当時の二人の親密な仲らいを窺うことができる。⑦は二次次の学生に課したものである。未来に向けてのときめきを含め出会いに前向きに関わる精神の若さが現れている。「ガラスの小瓶より云々」の指摘はやや題詞にそぐわないところもあるが、その繊細な感性が近い未来への心はずむ予感も含まれているように思い掲出した。そうした予感ば周囲の自然に目を向ける中にも窺える、

「貴なるもの」(上品なもの)では、次のようなものがあつた。『枕草子』で「貴なるもの」は「淡色に、白がさねの汗衫。

雁の子。削り水に甘葛入れて、あたらしき鏡に入れたる。水晶の数珠。藤の花。梅の花に、雪の降りかかりたる。いみじううつくしき稚児の、苺など食ひたる。」(三九段)とある。

⑧「貴なるもの」(大学院教育学研究科「国文学特論」平成九年六月)

夏のいと暑き日に、涼しげなる人。

高級ブランドの品身につけたるに、似合はぬことなき人。

フェラリに乗りてスタートいと速き人。静かなるスタートは、なほあてなり。

(M・K 女)

みかんの皮をむく人の、中の袋の筋まで丁寧にとりたる。

酒宴の折、すわりたるミニスカートの女の、白き布を膝にかけて談笑したる。皆酔い乱れたる中に一人にこやかにてくずれざる姿ををかし。

ジュースにコースターを必ず添えてもてなす一人住みの男。

歩む猫の後ろ姿。音なく腰を振りつつ進みたる。「餌やらん」と誘へと振り向きだにせぬもあてなり。

(I・A 女)

この授業の受講者は国語教育専修の二人であつたが、それぞれ掲げた項目に周囲の事象を美的に捉えるセンスを読み取るこ

とができる。

『枕草子』類聚の章段は、清少納言がその感性に照り合うものを題詞に従つて選んで配列したものであるが、一方当該の授業での「もの」の類聚はそれぞれの学生の挙げた事項を教師側で配列したもので、一人の感性で統一されたものでないという指摘は免れない。しかし石田穰二氏には、「こういう知的な遊びが定子に仕える女房たちの間でよく行われ、あるいは定子を中心として大規模な類聚の試み、あるいはその下話くらいはあつたのではないか」という指摘があり、そうした類聚が女房仲間の間で生まれた発想を受けて清少納言によつて為されたとする、共同の場というその発生的なところとの共通性は授業での試みの有意性を証すように思われる。類聚の章段のおもしろさを今井源衛氏は「人に気付かれない新しい意外なもの美しさ、

おもしろさであり、それらの奇想天外な配列のもたらす連想のおもしろさ³⁾とされるが、受講生が示した個々の項目にはそうした現代の生活における新鮮で個性的なひらめきが認められ、特に大学院生の提出したものについては、事項の提示やその短評の付加に充実度が見られ、更に一つの個性による選択配列の方向性を示している。それぞれの授業の目的に応じた「枕草子」の再生の試みの充実について、受講生の意識化を含め今後も検討していきたい。

三 「試み」をめぐる課題

前節までに示した「現代版」の試みは、『枕草子』の類聚・随想・日記回想という三章段群のうちで、類聚的章段の、特に「もの」型章段に限られる。

「は」型の中で、「山は」など地名章段については、当時の歌枕などが清少納言の念頭にありそれへの興味によって掲げられる場合が多い。それに対し、現代ではそうした歌枕や古歌という前提的に認識されるものがない。その点、地名類聚の場合はそのことから名への興味をわけることにはやや無理がある。

杉山重行氏は、『枕草子』「は」型の基本的性格について、先行作品の中で成長してきた伝統的なもの（歌枕のもつ世界など）をそのまま継承しているのではなく、名称への興味を示し、更に名称への興味と古歌などの典拠に支えられて自己の関心をあらわす説得文章を綴るという具合に、歌枕を抜け出している世界が認められると指摘される³⁾。そして更に実体を見つめての、

体験をふまえての、新しい独自の評価を生み出していく意識が生じて随筆化の方向を辿ったのではないかと推測されている。実体を見つめ新しい独自の評価を生み出す例として、「木の花は」（三四段）「笛は」（二〇四段）などの章段が挙げられる。

『枕草子』「春は」（一段）の章段も独自の評価を内包する「は」型章段に位置づけられる。この章段に倣って次のような段を編むことができた。

⑨「春は」（日本文学講読演習Ⅰ）平成十七年六月六日

春は 晴れたる日盛り。桜の満開に咲きて並木道を彩る。風吹きて花びらの舞い散るはさらなり。 (O・S 女)

夏は 夜。花火のはなやかに咲きて、きらめきながら散りゆきたる。一つ大きく広がるも、三つ四つ連なり上がるものをかし。 (O・A 女)

夕暮れも、雨の降るはよし。降りし後の蒸した匂ひに、夏の季節を感じこそすれ。 (K・K 男)

秋は 夕暮れ。つとめても良し。少し肌寒くなりし空気の、鼻につんと入りたるは、いと心地よし。また、風に乗りて金木犀の香りなどしたるはさらなり。紅く輝きたる夕日の照らす夕空は、いふべきにもあらず。 (D・T 男)

夜。日暮るるやたちまち夜来たりて、冷たき風に季節の移ろふさま感じらる。月夜はなほよし。澄みたる空気に輝きを増し、夜すがら眺むれど飽かず。夜の長きもまたをかし。 (T・A 女)

冬は 朝。雪につける足跡。 (M・A 男)

白く輝ける道に、足跡が一筋遠く続ける。自転車轍のあやうげに続くも、つきづきしくをかし。 (I・T 男)

この⑨は、「一日のうちで好ましい時間帯」を各季節の中から選ぶという限定をして受講生に題詞に合致する項目を求めたものである。春、夜明け方の、微妙に移り変わる空や雲の明るさや色合いに美を感じる清少納言の感受性と文章力には及ぶがたいが、周りの自然に視線を向け美として捉える契機を与えることになったように思う。このような形で「は型」章段作りを行うことができる。

こうした「は型」章段の題詞は、『枕草子』にはないものでも、人事に関するものを含め、更に現代の生活の様態に応じてふさわしいものを考えていくことがあってよいのではないかと。

杉山氏は前掲論文で「もの」型章段も「は型」と同様に名への興味から実体の評価という傾向を考察することができるとされるが、「もの」型章段は「形容詞＋もの」という形で自己の見聞や感想を記し類想の度合いを高めている点で、更に随筆性が高いといえる。主にこの形式に倣って題詞を与えそれに合致する項目・短評を求めることは妥当な方法であると考ええる。

こうした類聚的章段を念頭にした「現代版」の試みが更に随想的章段の形に展開していくことの可否については、それを必ずしも『枕草子』的形式の中で扱う必要はないように思われる。随想的章段は「……もの」という枠を取り去った、より自由な形式をもち、自然や対人関係に触れた心の動きを綴るということに広がっていくものであるが、それは『枕草子』から離れて随筆なりとして扱うのが望ましい。同様に日記回想的章段の形式に則って「現代版枕草子」を作る必要性もないであろう。

ただし、類聚的章段の「現代版」作りの試みにより『枕草子』

的発想・感覚を体感した後、そうした発想や感覚が定子サロン
の明るさの中で生動したものであることをあらためて確認させたい。日記回想的章段にみる定子の開放性・明るさが類聚的章段の感覚と不可分のものであり、道隆亡き後も清少納言の心意気によってそれが維持され、定子と清少納言の心の繋がりに
いて『枕草子』が作られたということを確認することになれば
と思う。

「現代版枕草子」作りの試みは、中学校・高等学校の古典の
授業においても活用が可能なものであろう。各年代特有の清新
な感性が、それにふさわしい課題を得て披瀝されればと思う。
これにより清少納言の、現代にも繋がる生きた感覚を知ると
もに、そうした感受性をもって現実の様々な事象を新鮮に捉え
ることの一つの契機になればと期待するところである。

- (1) 『枕草子』本文の引用は、萩谷朴氏校注『枕草子』
(新潮日本古典集成)による。
- (2) 石田穠二氏『枕草子』(鑑賞日本古典文学、昭和五〇
・一二、角川書店)総説。
- (3) 今井源衛氏「清少納言の美意識と体験」(『王朝文学の
研究』昭和四五・一〇、角川書店)。
- (4) 杉山重行氏「枕草子の類聚的章段」(『枕草子講座Ⅰ』
昭和五〇・一〇、有精堂)。

(富山大学人文学部教授)